
迷子になった。蘭天真島（らんでんまとう）

神崎 美由紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷子になった。らんでんまこ蘭天真島

【Nコード】

N1897J

【作者名】

神崎 美由紀

【あらすじ】

主人公が、島に落ちた話。

プロローグ（前書き）

始めまして、初めて小説を書くので至らない点があると思いますが、どうか生暖かい眼で見えて頂けると嬉しい限りです！
それでは、よろしくお願いします！

プロローグ

く沖の場く

……

パチッ…

ゆっくり目を開けると…そこには、コバルトブルーの海が見えた。

「うつ…ここは何処じゃ？」

何とも古き言葉遣いを使う少女が何故か浜辺にいた。
少女は立ち上がり、辺りを見渡した。

「ん？お主…何者だ？」

突然、ある男性が少女の背後で話しかけてきた。

「！」

少女はびっくりして、後ろを振り向く。

男性は、昔の野良着のようなものを着ていて、背中には、大量の巻物が背負われていた。

「…無礼な奴じゃの…人に名を聞くときは、まずは自分から名乗るようにと…親

に教育されなかったのか？」

少女は男性の態度が気に食わなかった性が、何故か指導を始めた。
って言うより

、先に名乗ればいいのに…

「うつ…お前、背が低い割りに口に出すことは達者だな…いいだろ。
俺の名は七

司。この蘭天真島、ティーバム村の住人さ。これでいいか？」

七司は少女に対する人権侵害を言つと、なんと、素直に名を名乗
った。

そうそう…少女は今の所だけでいうと、身長は140センチぐら
いで…髪はロン

グでストレートです。

「うん？蘭天…？いや…そんな島はー」

少女は七司の話を途中まで聞くと、後は無視をしていた。そして
何か考え中らし
い…

「…？おい？」

七司は少女の肩に手を掛け、話を再開させようとする。

「……！？さわるでない！」
「うわっ！」

少女は反射的に七司を背負い投げをするといきなり、怒鳴った。
一体、こんな小

さい体の何処にそんな力があるのだろうか……

七司は背負い投げされた後、呆気なく弱音が出る。そして、七司は重く目を瞑り
、何が起きたのか全く分からないようだ。

「悪い、この島の近くに日本列島はあるか？」

少女は一度謝ると、七司に少女の住んでいたと思われる場所を聞いてきた。

と、言うよりもいい加減、七司の質問……名を名乗ってほしい。

「日本…列島？知らないな…ここは蘭天真、男しか住んでいない村。
日本列島よ

りも、ここはこの島しかないってー」

七司は少女の質問に答えるのはいいが、突然、少女の顔に異変が

↓

「ふざけるな！今すぐ戻せ！！日本だ！日本にー」
「うっ…おっ落ち着け！先ずは名をー」

「名を名乗る暇などない！ああ」

少女はいきなり七司の野良着の首ヒモをもち、揺らす。

七司は必死にギブアップという、信号を送るが、その力は一方に収まる気配がない。

そして、七司は元に話を戻すことにした。そうすると、少女は慌ただしくなっている。

「おい！人に名乗らせておいて、それは無いだろ？」

七司はついに、少女に向かって怒り始めた。

「教育というものを知らないお前が悪いのじゃ。それに見知らぬ人間に名乗る名

などない。とにかく、我をお前の村まで案内しろ。」

少女は上から目線の命令をする。もしかして…少女は大金持ちのお嬢様！？

「くっ、まあいい…着いて来い！」

七司は荒い声で少女に言った。余程、命令されたが気に入らなかつたらしい…

そして、七司は少女に背を向けて歩き出した。

プロローグ（後書き）

感想おねがいします！

【一日目】ずっと彷徨う二人組み

……
　　森の中

七司曰く、“森を通った方が早く村に着くんだけ！”とのこと……で、二人は森の中、村へと向かっている所だ。だが……二人に事件が起こるのであった。

「おい、まさかと思ったのだが、迷ったのでは……無いだろうな？」

少女は怒りを抑えながら、七司に文句を言った。
少女は汗だくで疲れているようだ。

「そんな筈がない！この道は俺が五才の時から歩いているんだ！迷う筈がない！」

もう……2、3時間も経っているのだが、七司は眉間に紫波をよせ、何故か笑いながら歩いている。もう……気づいたと思う人もいると思うが……七司は凄い方向オンチだ。

「当てずっぽうでは…良知が明かん！我が前の方が断然早い！！」

少女は七司の腕を掴み、先頭に立ち、大幅で歩き出した。

一体、少女は何者なんだ？

【二日目】ずっと彷徨う二人組み（後書き）

また見てね♪

ティーバム村に到着したと思いきや大喧嘩！？

やっと…七司と少女は村の大門まで、辿り着くことができたようです。

「…誰だ？お前…」

七司と少女の目の先には本を読んでいる男性が現われた。

その男性の格好は…サムライのような肌着を着ていて、メガネを欠けている…

まるで、世間でいわゆる勉強家のようなようだ。

「羅宇！？」

七司は羅宇にヘトヘトになった重たい体を預けた。

「おい、お前…コイツに何をした？」

まさかの村の大門で大ケンカ！？

羅宇は七司をグツと抱えると、少女を恨んでいるかのような目で睨んでいた。

「何もする訳がなかるうが…強いと言えばの、コイツが悪いのじゃ

…コイツが！」

少女は腕を組み、羅宇に眼を返してやるように飛ばしていた。

明らかに…

この二人の仲はとても悪い関係になるであろう…

少女は今まであった行動を、すべて七司の性だと押し付けた。

確かに…

七司も誤る点もあるが、一番悪いのはこの少女だと思うのだが…

「…そうか、それは悪かった…名は？俺の名は羅宇と云う。」

何故か羅宇は納得すると、少女に名を名乗り、少女の名を聞くこととする。

確か…

さつきもこんなような展開があったように気がするのだが…

果たして、少女は本当に名を名乗るだろうか…

「…うつ、我は名を名乗る義理はないが…一様名乗られたからの？
我の名は、華城美亞流という…のじゃ。」

何と！

美亞流は、ついに名を羅宇に名乗ったのだ。

それで、何故か美亞流は顔を赤く染めていたのは、羅宇には少し気にしていたのであった…

長かった…ここまでの会話が…と七司と羅宇は思っていた。

「ん？…それで、どうして華城さんは男しくない村に来たんだ？何か用でもー」

「そんな訳があるか！」

羅宇が丁寧に美亞流に接していると、突然…美亞流が反発していた。

美亞流は一体…何が目的なんだ？

「じゃあ？」

「もう…よい、悪いが此処の村で、一番偉い奴に逢わせて欲しいのじゃ。そして、この意味不明な村を出て、我は家に帰るのじゃ！」

美亞流は羅宇に上から目線で、命令をすると…自分の主張を押し付けた。

何て最低な女であろうか…

「ふん、大体の事情は分かりました。俺に着いて来てください。華城さん…」

羅宇は七司を背に背負うと、何故か美亞流の腕を引っ張る。

多分、美亞流が着いて来ないと思ったからであろう…

しかし、美亞流は羅宇に腕を掴まれている性か、自分が持っていたアタッシューケースをカラカラと片手で転がしていた。

それも、幼稚な体で…

何とも哀れ塗れの姿であった…

ティーバム村に到着したと思いきや大喧嘩!?(後書き)

本当に遅れてすみません?

まだネットがなくて…でも、できるかぎり頑張りますので、よろしくお願いします?

七司… 出番ご苦労様でした?! (前書き)

美亜流のあの性格…

ティーバム村の長老の風魔が本当に美亜流の怒りを沈められるのか…

七司… 出番ご苦労様でした？！

羅宇と美亜流（七司は気絶中…）は長老の家に着く。

羅宇は長老に美亜流について事情を話した。

「ほう… 君が美亜流ちゃんか… ようこそ、ティーバム村へ…」

長老の名前は風魔。

風魔は、美亜流をじっくりと見ると… のんびりした声で迎えた。

「ティーバム村？」

美亜流は村について気になっていた。

「ん？ ああ… 美亜流ちゃんはまだティーバム村については知らないんだよね？ でも、七司くんからは一応… 聞いたよね？」

「あ、ああ… コイツから聞いてコトは、男しくない村とだけじゃが…」

美亜流は七司を猫のように首を掴み、説明されたコトを風魔に話した。

「うん…美亞流ちゃん、そろそろ、七司くんを離して挙げてくれるかな？苦しそうだし、休ませてあげてね？」

「ん？そうじゃったの…」

バツ…

美亞流は風魔に言われたことを素直に聞き入れた。

もしかして、美亞流は自分よりも年上じゃないと耳を傾いてくれないらしい…

「まあ、七司くんは寝れば直ぐに治るから大丈夫だよ？それで、美亞流ちゃん…何故、この村には…男しくないと思う？」

風魔は美亞流に村について聞いてきた。

「この我が知る訳が無いじゃろ？どうせ、この村にいる男共が女に嫌われたとかじゃろ？見た感じ…どいつもコイツも人気があるような奴がいないからの…」

美亞流は気付いていない様だが、風魔と羅宇は物凄く傷付いていた。

「ん、うん…羅宇くん、お茶いいかな？」

「はい…」

風魔は心の準備させるために羅宇にお茶を頼んでいた。

羅宇は奥の方に逃げるように行ってしまった。

「美亜流ちゃん、この村にはね？ほら…女達がね、うん…島の何処かにいると思うんだ。昔の歴史で言つと…100年前ぐらいに、女達が自殺を図つたらしい…」

風魔はまだ気にしているらしく、動揺して話していた。

「そうか…それは悪かったの。我は帰ろうかの…」

美亜流は、風魔の話を聞くと立上り、帰る準備を始めたのだ。

「待つて…」

羅宇はお茶を床に置くと、美亜流の足に掴んだ。

何か…親に玩具を買ってくれなく、ひたすらねだる子供のようだ。

「何をする！？無礼な…女の足を取るなど…」

美亜流はロングスカートを着ていた性が、顔を真っ赤にして足を引いた。

「まあまあ…美亜流ちゃん、此処で住んでいる人たちはみんな優しいから…戻る日が来るまで、此処に居てもいいですよ…?」

風魔は緑茶を啜り、平然とした顔をしていた。

「ふっ…ふっ、ふざ…ふざっけるなー!!!今すぐに日本に返せっ！」

美亜流は風魔の半襟を掴んで、脅しを掛ける。

不良少年が40歳ぐらいな男性に対して、カツアゲをしているにか見えない。

「長老、俺と華城さんで一对一で話をさせてください。」

突然、羅宇は冷静に風魔に美亜流のコトについて、許可を得ようとした。

「ん?それもいいでしょう…今は何も無いと思うので、どうぞ…」

風魔は、楽々と風魔の半襟を掴んでいる美亜流を羅宇に引き渡した。

「オイッ！我はごめんじゃぞ！こんなコトをしている暇は…」

「今の華城さんは普通の女の子何だから…だから、俺がこの村を案内してあげるよ…荷物なら、長老に置いてっても大丈夫だよ?」

美亜流の話を無視すると、羅宇は美亜琉の手を握り、無理矢理…美
亜流を連れましていた。

七司… 出番ご苦労様でした?! (後書き)

微妙な説明文だと思うので、できれば… ビシバシ言ってください?

お願いします?

改善発覚？（前書き）

今まで気づかなかったといか…報告？私の小説って、場所ごとに書いたりして…まあ、そんなことで、短かったりします…

改善発覚？

長老の家から出た羅宇と美亞流は、村を見回っていた。

そして…何故か美亞流の身の回りには、村人が囲まれていた。

「おっ！こ、これが、俺たちにとって、遠かった存在…女なのか！？」

羅宇が美亞流を村を案内していた時に突然、赤い巫女服を着たちよつと小さい男の子が現われた。

「夏夜か…冬馬がいないが、どうかしたのか？」

羅宇は夏夜という男の子に何かを質問していた。

「んあ？冬馬なら…夕飯の支度だー」

『おい…』

夏夜と羅宇が話していると美亞流が羅宇の服の裾を掴んで、小さい声で呼んでいた。

「ああ…コイツは神社に住んでいる夏夜^{カヤ}だ。いつもなら、双子の冬

馬と一緒に居るのだが…今日はいないらしい…そのうち会うと思うが…」

羅宇は美亞流に夏夜のことを簡単に紹介をしていた。

「ふざけるな、誰がそこまで居ると言っただ？我を馬鹿にするなよ…えっと、力…カヤと言ったかの？」

美亞流は羅宇に対しては酷く言っただ、夏夜には優しい声で掛けていた。

きつと、美亞流は自分と同じくらいの身長だからと安心して居るのである…」

「力…俺はあゝ…」

夏夜は美亞流の声に何故か顔を赤く染め、ペタリと地面に座り込んでしまう…」

「おい…大丈夫なのか？」

美亞流は夏夜の様子に少し心配していた。

あんな美亞流でも…人を気遣うことがあったんだな…

「華城さん、夏夜のことは…ほつといってくれて…結構ですよ？」

羅宇は座り込んでいる夏夜を見ると、飽きたように美亜流に告げ、美亜流の腕を引っ張っていた。

「おつ、おい！！待てい！羅宇、この俺様から逃げらー」

「俺様」と言っただけなのは…この俺様だけだ。なあー夏夜」

羅宇に反発していた夏夜に対して、いかにもナルシストのような男性が…夏夜の頭の上に腕を乗せていた。

しかも、いやらしいとも言えるぐらいの美声で夏夜を攻めていた。

「ハア…華城さん、もう行きましょう…此处にいたら、本当にー」

「待て、羅宇…まだ俺様の自己紹介がー」

「ん…？」

羅宇は美亜流に場所を移そうと提案するが、いきなりと言うか…急にナルシストのような男性に羅宇の肩が掴まれた。

男性は羅宇を引き止めることができたが、羅宇の苛つきを隠す笑みにゾクツと怖がっていた。

「うつ…一応、略式で…俺様の名前は翠^{スイ}幻^{ゲツ}律。もしまた君と会えたら、詳しくー」

翠幻律は美亜流の羅宇と握られていない手をギュツと握りしめると……軽い自己紹介だけで済んだ。

しかし……後々長く話そうとすると、急に羅宇がまた笑みを浮かべていたので、何故か夏夜と、この場から逃走をした。

「ふう……」

羅宇は翠幻律と夏夜が逃走した後ろ背を見ると一息つく。

そして、美亜流の手を取ると……また歩き始めた。

「……そんなに……村人と一緒にいるのが嫌なのか？」

美亜流は羅宇の顔を覗くように見ると、何とも楽しそうに羅宇に聞いた。

「……そんなことはありません。俺は……嫌、華城さんが今の状況で村人と話すと混乱すると思ったので……たった一人、それも小さい女の子が……こんな男しかいない村に来たら、無防備だと思いますし……」

羅宇は何かを言おうとしたが、何故か言い止めた。

そして、美亜流の状況を解らせるように冷静に羅宇は美亜流に語り始めた。

「我が無防備じゃと？…ん？確かに我は無防備じゃな…我は自分のコトは何もできからのー」

美亜流は急に辺りを見回し、改めて自分の立場が分かったらしい…

そして、羅宇と美亜流はあの海に行くのだった…

いつからだろうか…羅宇と美亜流がこんなにも仲が良くなったのは…

改善発覚？（後書き）

何か…凄くショックでした？完成したデータが目の前で消してしま
うとは…大泣きですー？
だから、所々間違えていたら…教えてください。

過去の疑惑?! (前書き)

急展開と言うよりも…イマイチ理解不能になるかもしれませんが、
お願いします？

過去の疑惑？！

「どうやって…この海に来たのですか？」

羅宇は美亞流と神奈希海に行くと手を離れた。

「ん？…我はどうして、この村に来たのかは、分からない。じゃが…此処に来る前のことは未だに覚えておる。」

美亞流は羅宇の問いに疑問で答えると違う話をしていた。

「何が…あつたんですか？此所に来る前は…」

羅宇は下を向いて落ち込んでいる美亞流を心配をしていた。

しかし…羅宇は少し引き目だった。

なぜならば、美亞流はあくまでこの村のお客様でもあるからだ。

「…我は飛行機で仕事の取り引き場所向かっていたのじゃ…しかし、
我の飛行機は…墜落事故に遇い、我は死んだはずだった…」

美亞流は村に来る前の出来事を羅宇に話した。

それだけ、美亞流は羅宇に対して心が開いたという証拠だろう…

「…死んだって、今は生きてますよ？って…此所はあの世とかじゃない！！」

羅宇は美亞流の肩を揺さぶり、生きていることを自覚させる。

「分かっておる。だから、生きていると我は自覚をした。しかし…我が事故で死んだあの記憶は…」

美亞流は羅宇の手を離せると深入りをしていた。

「…華城さん、あなたは生きてます…そして、事故で死んだのも…事実です。しかし、華城さんが此所に来たのは何かあるんですよ…だから…」

「それは嫌じゃ…」

羅宇は美亞流の深入りを解くために、ブツブツと推理していた。

見事に美亞流は深入りから抜けたのだが…羅宇の案には、却下していた。

「…まだ事情は聞きたかったですが、聞かないでおく。でも、華城さんが今すぐ此处から出るのは…難しい」

「何故じゃ？」

羅宇は美亞流に説得した。

美亞流は何故、この村から離れられないのかを聞いた。

「この木を…」

羅宇は一本の小枝を手を取った。

「何をする気なのじゃ？」

美亞流は不思議そうに羅宇をじっと見ていた。

そして…羅宇は小枝を思いっきり海に向かって投げたのだ。（良
い子みんなはやらないでね！）

その時、美亞流は驚くことしかできなかったのだ…

「これが事実ですよ…」

羅宇は投げた小枝が海の竜巻で戻ってきて、また手に取った。

パシン！？…ナイスキャッチ！！

「くっ…我は帰ろうかーうっ…」

美亜流は海に向かおうとすると急にペタリと座り込み、両手で頭を抑える。

「大丈夫か？」

羅宇は美亜流に近付き、声を掛ける。

「頭がイ、イタイー」

美亜流は痛みに堪えることしかできなかった。

《まだ帰っては行けないよ？美亜流は、回復してないから…この村にいなさい。》

美亜流の頭の中に男の声が聞こえた。

その男は美亜流にこのティーバム村にいるように説得させた。

「くっ…（いいじゃろ…この村でオモシロおかしくしてもらおうではないか…）ふうー…仕方がない。もう夕方じゃ、今回は泊らせてもらおうではないか？」

美亜流は…頭の中にいる男に引き受けることにした。

そして、羅宇にこの村に住むことを宣告した。

「うつ、うん…わかった」

羅宇は少しだけ動揺していた。

何故なら、今まで痛がっていたいた美亜流が平然としていたからだ。

「何をしている？ほら、我を楽しくさせて見せるよ？」

美亜流は今までにないくらいの笑みで、羅宇と腕を組み、村に戻る
のであった…

過去の疑惑?!（後書き）

本当に感想をお願いします。

どんなことでもいいのでお願いします？

美亜流のワガママ宣言?! (前書き)

遅れてすみませ〜ん?

とても長くて、まとまるのに時間が掛かりました?

いやぁ…ヨクヨク考えるとまだ一日経ってないんですね…この話。

後…書き方が、微妙に変わったと思うので…お願いします(^-
^)/ ?

誤字脱字も…

美亜流のワガママ宣言?!

【詩文】

暁ように燃え上がる夕日が沈んでゆく時のコト…

強く輝き始まる真ん丸な月が頂点に昇っていくのじゃよ…

【本文】

「ほう」…羅宇くんが美亜流ちゃんを説得させて、納得させたのか
…」

風魔は羅宇から美亜流の事情を聞くと…普通に受け入れていた。

しかし、風魔は驚くことではなかった。

風魔が一番驚いていたのは、美亜流と羅宇が仲良くとは言わないが、手を繋いでいたことだった。

「納得…?この我が納得する訳がないじゃろ?我は少し休みを取ろうとして入るだけじゃ…」

美亜流は皮肉れて入る性が、風魔に痛々しい毒舌を吐いていた。

「そうですか…」

風魔は腕を組み、深々しく何かを考え込んでいた。

「ん？おい…」

「何だい？急に…」

美亜流は風魔の態度が気になったのか、怒りを納えながら呼び掛ける。

風魔は美亜流の眉間にシワを入れている顔を見ると…少し目を丸くして驚いていた。

「何故、そんなに考え込む必要があるのじゃ？我がそんなに不満か？」

「いやあ…不満じゃないけど…」

美亜流は風魔の不満そうな顔を見ていた時、何故か心配していた？

そんなことはないか…

「ん？それじゃ…何のじゃ？！」

「んっ？ほらあ…美亜流ちゃんが納得してくれたのは、嬉しいけど…ね？何処で泊めるか…」

美亜流が風魔の近くに行き、襟首を引っ張っていた。

風魔は美亜流の心配そうな顔を見ると、アタフタと動揺していた。

そして…ある事情を話す。

そう、美亜流が島に来たのは…突然な出来事で、とても空き部屋なんて…あるはずがないのだ。

「それならー」

羅宇は正座をしていると、何かを閃ひらめいたらしく、手を挙げたのだが…次の瞬間ー？

「俺の家に！！」

突然、ティーバム村の村人たちが風魔の家に来てきたのだ。

どうやら、羅宇や風魔とその他に美亜流と会ったことがある村人たち以外は…まだ美亜流の本当の恐ろしさが分らないらしい…

ガヤガヤ…

「何の騒ぎじゃ？コイツ等は！？他の者の家に対して…礼儀と言うものを知らないのか？！」

美亜流は村人たちが無断に入ってきたことに対して、怒りを発していた。

「いつやあゝ！！何せ、この村には…美亜流ちゃんしか女の子はいないからね？」

風魔は何故か微笑みを浮かべ、美亜流に念を押していた。

『そういうコト！だから、僕と一緒に…』

『いーやつ！！此処は俺が…』

『ふざけるなよ！どう見ても、この俺が泊めないと不味いだろ？』

美亜流を見に来た野次馬たちが、何故か口喧嘩？！

男達が一人の女を取り合うって…美亜流は平気なのであろうか…？

「フン、フハハ…」

野次馬の話を聞いていた美亜流が急に黒そうな笑い声を出し始めた。

「どうしたんだい…？もしかして、美亜流ちゃんは男の人と話すのは…苦手だったかい？」

「ふ、ふざけるなっ！！何故、お前等愚民風情と…ひたしく屋根の下で住むなんて、我は絶対に…ごめんじゃッ！！」

風魔は美亜流の様子の変化にオドオドと心配していると…美亜流がついに本音を言い出した。

それにしても…美亜流のお嬢様キヤラは…いい加減収まらないかな…？

「…ワガママ」

羅宇は美亜流の本音にズバツと槍を指すような言葉を美亜流に言ってしまった。

まあ…よく美亜流に対して、羅宇はあんなことを言えるなあーっと、回りの村人は感心をしていた。

そういえば…美亜流が村に住むことになった場合って、当然…居候は決定であるっ…と思うのだが…？

それを美亜流の自己主張には…本当に困ったモノだ…

「この我が我が儘じゃと？ふざツけるなっ！！我は絶対に…ごめんじゃっ！！！」

美亜流は村人の意見に気に食わず、また無謀に村から出ようとしていた。

「ダメだよ？美亜流ちゃん…」

風魔は美亜流の腕を掴み、説得をした。

「ムッ！我を子供扱いするなっ！！それにー」

美亜流は赤面して、風魔の手をはらった。

「美亜流ちゃんはこの村で一人で住むのは…絶対に無理があると思うんだ？羅宇くん、頼んでもいいかい？」

風魔は勝手に美亜流の話を進行していた。

「ふざけっ…」

「分かりました。」

羅宇は美亜流の反発を無視して、風魔にいかにも冷静な返事をしていた。

「おい、我の話をー」

「荷物は俺が先に持って行きますから…」

羅宇はバタバタと…美亜流の荷物をまとめ、持っていつてしまった。

「我の話を聞かぬとは…何うえー」

「まあまあ…羅宇くんは少し対人恐怖症だからね？美亜流ちゃんも少しは指してあげてね？」

美亜流が怒りに対して、風魔はゆっくりとお茶を飲みながら…羅宇について、話をしていた。

「我が人に気遣えと？あんな男にイチミり足りとも興味などない。長く持つて…一年だ。一年後には、帰らせてもらうぞ！」

美亜流は風魔にある宣言をした。それは…美亜流にとっては…長くて短いような期間でもあった…

そして、美亜流は自分の荷物を持って行った羅宇を追って行ってしまった。

「オイオイ…長老に反発したのってえ…あの女が初めてじゃないか？それもスゲー！迫力？！」

突然…美亜流と風魔の話を聞いていたあのナルシストな彼、翠幻律が美亜流の怒りに微々ついていた。

そ…っと！！美亜流のお嬢様キャラは翠幻律には応えたんですね…

「んっ？んっ…僕的には美亜流ちゃんぐらいが普通の女の子だと思うけどなあ…まだあの幼児さがー」

「ああ…はいはい、わかったから…」

どうやら、風魔は皆が驚く程の世間で言われる『ロリコン』らしい…

翠幻律は風魔の発言に引きながら、呆れた発言をしていた。

それにしても…この二人はどういった関係？

そして、美亜流がこの島に来たことで、この村が大きく変わるとな
ど…村人の誰もが想像もしなかったであろう…

美亜流のワガママ宣言?! (後書き)

いやぁ…『ロリコン』だけは許して?

キャラ設定もまだなので、よろしく願いますーm
m? (――)

羅宇と美亜流の熱き友情?! (前書き)

遅れて

すみませんでしたあ

> m (—) m <

何とか完成♪

ですが…内容が変わったかもしれません(汗)

其処は…

何かごめんなさい。

羅宇と美亜流の熱き友情？！

く羅宇の家の前く

美亜流は羅宇の後を追いつつ、やっと家まで追いつくことに成功をしたのだ。

美亜流「はあ……はあ……やっと捕まえたぞ。この愚民よ……はあ……」

息を切らしながら、美亜流は羅宇の腕を掴み……話しかけた。

ガバっ？？？

突然、羅宇は美亜流に掴まれた腕を投げ払った。

美亜流はその場で、尻餅をつけてしまう……

美亜流「うつ…な、何をする！！！愚民のくせに生意気な…」

美亜流は立ち上がり、羅宇の行動に言動によつて…攻め立てる。

自分のプライドの高さとポリシーがある美亜流は羅宇の行動に違和感を持つこと無く、傲慢な口調で羅宇と話している。

しかし…

飛び出した羅宇は、今までの冷静な心情とは…ほぼ遠く、怯え狂った顔が描かれていた。

そして、ぺたりと座り込んだ羅宇は…少し、間を置く。

羅宇「……ごめん。俺、あまり人と対等に話すの―」

美亜流「解つておる。風魔から聞いている…対人恐怖症だと。心配するな♪」

今でも泣きそうな喋り方で、話す羅宇に対して…優しく話し掛けた美亜流。

厳しさの裏には、‘優しさ’があるということですよ…

あの史上最悪なお嬢様でも、優しさはあるってこと……

羅宇「……ありがとう」

美亜流「そんなことよりも…お前等の家は古いの〜1から掃除か…」

羅宇「むっ、前言撤回。君みたいな人とは、一生掛けても…仲良くなれる日は来ない」

羅宇が立ち上がり、美亜流に一言礼を言おうとしたら…突然、美亜流が別の話題を切り返してしまった。

それに対して…羅宇は、イラッと来たせいか……美亜流に対抗心を

抱かせた。

羅宇「絶対に…対人恐怖症でも、君みたいな奴なんかには怯えることなんてな……」

美亜流「気に入らん！絶対にこの一年！！一年過ぎたら帰ってやる！覚悟しろー！！！」

美亜流は羅宇の隣に在った自分の荷物を奪い取り、勝手に羅宇の家に上がり込んだ。

ガラガラ……

美亜流「フン、健気な者にはぐお似合いなモノじゃ…我はごめんだが……」

羅宇「……チビ娘。」

美亜流「んなっ！気に入らん。もー寝る。」

無責任な美亜流の発言に文句を言う羅宇。

それに対抗した美亜流は自分の家のように寛ぎ始めようとした。

こうして、美亜流は島での生活をしたのであった。

羅宇と美亜流の熱き友情?! (後書き)

続きは…

またいつか書きます。

形成も変えたので、どうぞ読んだ御方は是非感想をお願いします
!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1897j/>

迷子になった。蘭天真島（らんでんまとう）

2011年10月6日10時58分発行